

# 願 い そ の 果 て に

宇  
古  
木  
蒼  
絵  
ラ  
ー  
ポ



願いの果てまで、戦い続けたすべての魔法少女たちへ捧ぐ



これはちょっとばかり、しくじったかな。

目の前でうごめく魔法の醜悪な姿を見据えながら、佐倉杏子は自分の失敗を鼻で笑った。

吹き飛ばされ、手の届かない距離に落ちて魔力で維持しきれなくなった槍が煙となつて消えていく

「痛いな、もう……」

脚を絡め取つた魔法の触手が杏子を引っ張り上げて逆さ吊りにする。天地が逆さまになつた視界の中でうごめく魔法を杏子にはにらむ。

杏子の声に反応したのか、魔法の本体が複雑に色合いを変える。胴体とおぼしき部分に横一線の切れ目が入り、口を開けたそこから出てきた筒状の物体が捕まつたままの杏子へゆつくりと近づいていく。

筒の内部では、機械とも生物ともつかない歯車のようなものがみつしりと並んでいる。不規則に魔法から伸びる筒の中から、歯車上の物体がきしむ音を載せて生暖かい風が杏子へ吹きつける。

「あたしの身体に触れるとは、魔法にしてはなかなかやるじゃない。ま、もうすぐ死ぬけどね」

自分を飲み込もうと近づいてくる魔法の触手に向かい、逆さ吊りにされながら杏子は不敵な笑み向ける。身体の前、なにも

ないところへ伸ばした左手へ赤い光の粒子が集まり槍の形を取る。杏子は一振りで自分の足をつかむ魔法の触手を切り落とそうと――

「いま助けてあげるから、ちょっとだけ辛抱してね!!」

突然に響いた声に杏子が思わず目を見開くと同時に、視界の中に自分より少し年上なくらいに見える少女が長大な銃を構えながら飛び込んでくる。着地と同時に手に持つのと同じ長大な銃が少女の周囲に次々に現れ、少女はそれらを連続で魔法に向かって射撃する。

頭の芯に響く奇怪な音を発しながら魔法が身悶えする。振り向いて杏子へウインクを飛ばすと、少女は胸元のリボンを引き抜いて宙にかざす。

「これでどどめよ……っ!!」

宙を舞うリボンが体積を増し、一瞬のうちに巨大な大砲を形作る。芝居がかったそぶりで空中へ飛び上がった少女は軽々と大砲を構える。

「ティロ・フィンナーレ!!」

大砲から放たれた巨大な光の弾が魔法をつらぬく。胴体に大きな穴を空けられた魔法が動きを止め、枯れ葉を散らすように

小さな破片に分かれて崩れてゆく。触手が消えたことで、身体を支えるものの無くなった杏子は受け身を取る間もなく頭から地面に落下して転がる。

「危なかったわね。もう大丈夫よ。身体に怪我はない？」

魔法の消滅と同時に境界が消え、揺らぎながら元の街の風景が戻ってくる。奇妙な衣装に身を包んだ少女は、尻餅をついたままの杏子に向かって笑いかける。

「もう怖がらなくてもいいのよ。ほら、立ちなさい」

耳の後ろで二つに結った明るい色の髪をカールさせ、現実離れた華美な服装に身を包む少女が手を差し出す。手を取って立ち上がらせられながら、杏子は少女の姿をまじまじと見つめる。

「いきなりこんなことに巻き込まれてびっくりしたでしょう？」

あれは魔法って言って——

なおも話しかけてくる少女をよそに、ひとつ息を吐くと同時に杏子は変身を解く。全身を包んでいた魔法少女の装束が赤い光にほどけて集まり、手のひらの上でソウルジェムの形をとる。

声を出さなくらい驚いている少女をよそに、変身前に服のポケットに入れていた菓子の箱を取り出して封を切る。

袋から一本取り出した菓子を口にしながら、杏子は少女に笑いかける。

「もしかして、あんたも魔法少女かい？」

「魔法少女が私のほかにも居たなんて聞いてないわよ!!」

「ママはこれまで、そんなことボクに確認しなかったらどう？」

怒りを込めてキュウベえへ食ってかかる少女を、杏子はホクリひとつ無いガラステーブルにおおづえをついて眺める。

杏子を救ってくれた魔法少女はバママと名乗った。たまたま現場がママの家のすぐ近くだったと言うことで、強く誘うママに連れられて杏子はママの家を訪れていた。決め手になったのは、家にはたくさんお菓子があるというママの言葉だ。

目の前にはママが用意してくれたケーキの皿がある。キュウベえをにらみつけるママをよそに、杏子は自分の前に置かれたケーキをフォークで突き崩す。

確かにママの家に用意されていた洋菓子類は素晴らしかった。アルバイト店員相手だと魔法を使って強制的に言うことをきかせやすいから、ここしばらくコンビニのお菓子ばかり食べていた身には新鮮だった。

「だけど、こんな騒ぎに巻き込まれるのはごめん。」

「つまりは私や、その佐倉さんみたいな娘がもつとたくさん居るってこと？」

「もちろんそうだよ。ママは魔法少女を自分だけの特別な何かのように思ってるみたいだけど、ボクからするとそれは大きな勘違いだよ」

キュウベえ。いまましい魔法の使者。したり顔でママと会

話しているその白い姿を前にしては、とびきりのケーキも美味しくない。

「佐倉杏子。君は自分以外にも魔法少女が居ることを知っていたらどう？」

「……ああ、そりゃもちろんさ。今までに何人も会ってきてるからね」

「ママとしては会話にならないと感じたのか、キュウベえが話を振ってくる。おびなりに答え、杏子はフオークでつつきすぎてだいたい崩れてきたケーキを口に運ぶ。

「佐倉さん、それなら他の魔法少女の娘に連絡を取ったり出来る？ みんなで一緒に戦えたら——」

「はあ？」

「ケーキを口に入れたまま、杏子はあっけにとられてママを見返した。他の魔法少女に連絡を取る？」

魔法少女は限られたグリーフシードを取り合うライバル同士だ。杏子が契約したのは十一歳の時だから一人きりの戦いを続けてもう三年近くになるけれど、成り行きでの一時的な共闘こそあれ協力関係などついで築いたことはないし、持ちかけたこともない。

いまこうしてママの部屋に招かれているのも、先ほどの戦いで一度助けられているからだ。これだけ美味しいケーキがあるのならまた来てほしいとは少しだけ思っていたけれど。

「助け合えばもっと楽に戦えるわ。みんなで、この街を守りま

しょう」

驚きのあまり杏子は口の中のケーキを飲み込むことすら出来ない。その沈黙を同意と受け取ったのか、ママがさらに続ける。

「自分しかいないと思っていたけれど、他にも仲間が居たなんて……こんなに嬉しい事ってひさしぶり」

すがるようなママの言葉。それに、ようやくケーキを飲み込んだ杏子は無言で首を振った。

魔法少女なんて、そんないいものじゃない。

「他の魔法少女に連絡を取れないの？ それなら佐倉さん、あなたは何？ あなただけでもいいから、わたしと一緒に戦ってくれない？」

「なんであたしが、あんたと一緒に戦わなきゃいけないわけ？」

「私たちは魔法少女なのよ。みんなを守るためには、二人でいっしょに戦ったほうがいいに決まってるじゃない」

にじり寄ってきたママが杏子の手を取る。その背中越しに、窓際のソファアの上に表情を変えず無言でたたずむキュウベえが見える。

「佐倉さん？」

何も答えない杏子の手を握ったまま、ママが不安げに尋ねる。魔法少女と言うだけで仲間意識を感じてでもいるのだろうか、あまりにも無警戒なママの様子に杏子は哀れみすら感じる。

みんなを助けるなんてお題目を唱える魔法少女に会うのは初めてだった。まさかママは、騙そうとしているなどではなく心

底からそんなことを信じているのだろうか。

「あんだ、いつ魔法少女になったんだ？」

「え？ ああ、それなら一昨年の秋からよ。小学六年生のときだけ……」

「なら、キャリアは二年ちよつとか」

魔法少女として契約を結ぶのは中学生くらいが一番多い。他の魔法少女たちと比べれば杏子はかなり早いほうだ。だからマ

ミも、契約したばかりの勘違いしたルーキーかと思っていた。

だが、実際は自分の方がほんの少し先輩だけだ。だからこそ夢見るようなマミの発言が気に障る。

「じゃあ、佐倉さんはいつから魔法少女をやってるの？」

「三年前からだよ。いまは十四歳、あんだと同じ年」

天涯孤独の身になったあの日から学校には行っていない。そもそも今の自分の戸籍がどうなっているのかも判らないし、気にしたこともない。もしかしたら、もう死んでいることになっているのかもしれない。そう思うと、中学二年とは言いたくなかった。

「同じ年つて、なんて素敵な偶然なのかしら。やつぱり私たちは一緒に戦う運命なのよ！」

同じ年と言うところにやたら反応したマミが満面に笑みをたたく杏子に迫る。まさかそこに反応してくると思わず、杏子は自分の愚かさを呪う。

「ねえ佐倉さん、私と一緒に——」

さすがにもう、付き合いきれない。

「じゃ、あたしはそろそろ帰るから。ケーキ、美味しかったよ」

「佐倉さん、まだ話は終わってないわ!!」

マミの手をふりほどいて立ち上がると、杏子は玄関に向かって足を進める。背中に呼びかけるマミの声に耳を貸さず、ドアを開けマンシヨンの廊下に出た杏子の髪を吹きつけた夜風が揺らす。

もうすぐ本格的な冬がやってくる。寒さに凍えながら夜の魔法捜しはおつくうだ。魔法少女なのだから、いつそ魔法で寒さをしのぐことは出来ないのだろうか。

とりとめのない思考をもてあそびながら小綺麗なマンシヨンの廊下を進む。

「待って!! 佐倉さん……」

玄関から飛び出してきたマミが声を上げる。振り向かないまま片手を上げて別れを告げ、杏子はエレベーターに乗り込んだ。「なんなのさ、あいつは」

マンシヨンの入口ロビーへ向かって降りてゆくエレベーターの中で、壁に背中を付けて天井を見上げる。汚れひとつ無い照明が眩しい。

魔法少女の身体能力なら、マミの部屋の高さから地面まで一気に飛び降りることだって出来る。気取ってエレベーターに乗ってしまったけれど、先回りしたマミが待ち受けていたりしたらどうしようか。

「……そんな事できる娘じゃないか」

自分なら必要とあらばいつでも魔法少女の能力を使っている。それが、魔法少女として生きると言うことだ。

だが巴マミは、日常生活で魔法を使うようなタイプには見えなかった。どうやら彼女は心の底から正義の魔法少女という存在を信じているようだ。最初は新人にありがちな勘違いかと思っただけで、それともまた雰囲気が違う。

いったい何を契約の願いにしたら、あんな風になるのやら。「みんなを守る、ね……」

契約したばかりの頃の記憶がふと蘇る。杏子がため息をつくと同時に、エレベーターのチャイムが一階へ到達したことを告げる。

マンションのエントランスホールを出た杏子は、口寂しさを紛らわそうと上着のポケットを漁る。

「あれ、落としちまったか」

ポケットの中に菓子が見あたらないことに気づいた杏子は顔をしかめる。きつとマミの部屋に落ちてしまったのだから。

忘れ物を取りにもう一度戻るなど論外だ。目についた道端のコンビニエンスストアに入り、スナック菓子を小脇に抱える。

「ありがとございましてー!!」

店員と店内にいた客に軽く魔法をかけると、商品をレジに通さぬまま店内から出て行く杏子に店員が大きな声で挨拶する。

一人きりの生活をはじめたばかりの頃はうまく魔法が効かなくて万引きで捕まったこともあった。あまりにも繰り返すのでコンビニやスーパーマーケットでマークされ、おかげでほとぼりを冷ますために二年ほどこの見滝原から離れた郊外の町へ出るハメにまでなった。

でも、いまはこの通りだ。

「魔法なんて、自分のためだけに使えばいいのさ」

包装紙を勢いよく開けて手を突っこみ、取り出したポテトチップを口の中に放り込む。

ろくに味わいもせずにかみ砕くと、慣れ親しんだ塩辛さが口の中を満たす。ポテトチップを飲み込みながら、杏子は左手の薬指にはまった魔法少女の証の指輪を撫でた。

\*

「佐倉さん、危ない!!」

目の前をふさぐ使い魔達が次々とはじけ飛ぶ。なぎ払おうと構えていた槍を下ろし、ため息をつきながら杏子は振り向く。

「あのさあ、なんのつもり？ あたしは一言も助けてくれなんて言っていないんだけど」

「魔法少女同士、助け合わなくちゃ。せつかく同じ魔女を倒そ

うとしてるのだもの」

「いまも銃口から薄く煙を噴いている銃を投げ捨て、微笑みながらマミはどこからともなく新しい銃を取り出す。

「一緒に？ あんたが勝手に後から結界に入ってきたんじゃない」

「マミに向かつて毒つきながら杏子は後ろ手に槍を振る。いくつかに分離しながらしなつた槍は、後ろから杏子に襲いかかろうとしていた使い魔の頭とおぼしき部分を正確につらぬく。

「この魔法のグリーンフィードはあたしがもらうよ。戦い損になりたくなかつたら、いまのうちにでていきな」

「グリーンフィードは貴女にあげる。でも、いくらあなたが強くても一人では限界があるわ。貴女のためにも、協力させて」

「なに言ってるのさ？ グリーンフィードが必要ないって、あんた本当に魔法少女か？」

薄気味悪い微笑みをたたえてこちらを見据えるマミを杏子はにらみつける。混沌が支配する魔法結界の中で、二人の魔法少女は視線を交錯させる。

横合いから飛びかかってきた使い魔を視野の隅で捉える。回し蹴りをくらわせてはじき飛ばし、身体を回す勢いを殺さぬまま杏子は使い魔に槍を突き立てる。砂のように崩れていく使い魔をよそに杏子が振り返ると、リボンでがんじがらめにした使い魔の頭をマミが撃ち抜くところだった。

「ほら、二人でならあつという間でしょう？」

得意気なマミが新しい銃を取り出して構える。相変わらずの

態度は気に入らないが、契約してから年数が長いだけの実力はあるようだ。助けになるかどうかはともかく、ついてこられても足を引つ張られる心配はしなくていいだろう。

「あんたが勝手についてきたって言うなら止めない。でも、もしやられそうになつても、あたしは助けないからな」

「ありがと、佐倉さん」

返事を待たずに杏子はマミに背を向けて駆け出す。いつもなら使い魔なんて相手にせずに魔法へ一直線に行くところを、マミと話して立ち止まっていたおかげで余計な魔力を使つてしまった。これ以上必要のない戦いは避けるべきだ。

魔法の気配に向かつて杏子は結界の中を駆ける。段差を飛び越えて細長いトンネルに飛び込み、身をかがめながら走り抜けた先には一本のスロープのみが続く。ただっ広い広間のような空間が広がっている。

左右に広がる底の見えない暗闇に目もくれず、ひとり分の幅しかないスロープを杏子は駆け上がる。闇の中で何かがうごめいているのが微かに見えるけれど、その正体を確かめる気なんてさらさら無い。

「佐倉さん、気を付けて!!」

後ろからマミの声が聞こえると同時にスロープの左右の闇から使い魔が飛び出してくる。思い切り前に突きだした槍の先端をスロープの表面に突き刺し、しならせた槍を使つて杏子は大きく飛び上がる。槍を手元に引き戻しながら空中で身体をひね

り、使い魔達の背後を取りながらスロープの真中に杏子は綺麗に着地する。

「うりゃっ!!」

幾つもの節に分かれながら伸びた槍が使い魔を切り裂く。崩れてゆく使い魔の向こうに、身体の回りにたくさんの銃を展開させたママが見えた。

展開させた銃を撃つ相手を失い、ママが視線を泳がせる。

「あたしのことでも撃つてみるかい?」

「そんなことっ!! 私はただ佐倉さんを助けようと思って……」

「あんたの魔法の使い方、工夫がなさ過ぎ。たくさん銃を出して撃つだけ? そんな事ばかりしてたら、すぐにソウルジェムが濁っちゃうよ」

何も答えぬままママが手を振ると、空中を漂って集まってきた銃が彼女の身体へ吸い込まれるように消えていく。

「こんなところで跳んだりねたりするほうが危険だと思うわ。もし、うまく着地できなくてこの下に落ちたらどうするつもりだったのよ」

一丁だけ手元に残した銃で、ママがスロープの下に広がる暗闇を示す。気色悪い動きで波打つ闇の中で、ときおり明滅する虹色の光は使い魔のものか、食われた人間達の魂か。

「はあ? もしかしてあんた、結界の中ではあたし達は空を飛べるのを忘れてるの? 落ちるわけ無いじゃん、こんなところ」

もう付き合っていないらしい。言葉もなく固まっているママを

尻目にきびすを返すと、邪魔にならないように槍を縮めて背中  
に担ぎ杏子は走り出した。

飛び出してくる使い魔を身をかがめてすり抜ける。屈んだ反動を利用して一気に足を伸ばして飛び上がり、上から降ってきた次の使い魔をすり抜ける。空中で前転して姿勢を整え、杏子はそのままスロープに沿って上空を一直線に飛んでゆく。

「佐倉さん!!」

暗闇から次々にあふれ出してきた使い魔がスロープを埋めてゆく。さつきママと立ち止まって話している時にはほとんど出てこなかったということは、自分たちの動きに反応したのか。

振り向けば視線の先で、ママは苦戦しながらも少しずつ歩みを進めている。使い魔が出てくるそばからリボンで拘束して銃で撃つだけの力任せの戦い方だが、意外にもママの動きは安定している。強化された魔法少女の視力で彼女の顔を眺めれば、激しい動作に多少汗をかいているようだけど焦りの色は全く見えない。

「これなら、放つておいても大丈夫だよな」

ママが苦戦している間にとっとと魔女を倒し、グリーンフィールドを独り占めにしてしまう。そうすれば彼女も、これ以上自分に共闘を持ちかけることの無意味さに気づくだろう。

ママの放った銃弾がまた一体の使い魔を消滅させる。それを横目に杏子は魔女が待つ結界の最深部へと向かう。

「鏡……? この中から気配がしたんだけど」

スロープを上りきり、その先に待つ光に飛び込んだ先は見渡す限りに広がる鏡の部屋だった。

「なんなのさ、これ……」

後ろを振り向くと入つてくるときに使つた光の扉は跡形もなく消えている。槍を構え、用心しながら周りを見回す杏子の姿が鏡に反射して何重にもなる。

さながら迷路のように組み合わさつた鏡のなかを、息を潜めて杏子はそろそろと進む。分かれ道が現れるたびに先を覗き込むが、先に広がるのは鏡と暗闇ばかりだった。

間違ひなく魔女が潜んでいるはずの結界最深部の大広間に、杏子の足音だけが響く。入口が無くなつてしまったから、ここで魔女を倒す以外に結界から脱出する方法はない。

周り中から魔女の強い気配を感じるのに、どこを見ても鏡と暗闇だけが続いている。

「あれ……?」

ふと足を止めて杏子は周りを見回す。視界の中では、見渡す限りたくさん鏡に映つた自分がちらを見つめている。

「あたし、こんな背が低かつたつ……?」

鏡の中で、魔法少女の衣装で槍を下げた自分はずか小さく見えた。他の鏡を確認しようと振り向いた杏子は、さらに信じられないものを目にする。

「なにこれ……? なんで、こんな、昔のあたしが」

いまはもう記憶の中にしか存在しない、教会と一緒に焼けて

しまった幼い頃のお気に入りの服。それを身につけ、いまの自分よりだいぶ幼い顔立ちの自分がちらを見返している。

「なんなのさ、これは!!」

腹いせに槍を繰り出して目の前の鏡を砕く。あつけなく崩れた壁のすぐ向こうにはもう一枚の鏡がある。

先ほどとは違い、パジャマ姿の自分が無表情にこちらを見つめている。そしてまたこれも小さな子供の頃に着ていた服だ。ふと下に眼をやれば、散らばつた鏡の破片のそれぞれに違う格好、違う年齢の自分の姿が映っている。

魔女の結界に入つたことなどもう数え切れない。見た目だけならもつとひどい物もいくつもあつた。だけど、これは……

床に散らばる無数の自分から目を背けて振り返る。目の前の大きな鏡の壁に写つた数年前の自分の姿。その首からは、杏子の家族が、父親が信じていたあの宗教のシンボルが掲げられている。

「……っ!!」

辛抱できなくなつて杏子は目の前にある鏡を打ち砕いた。

「どこにいる? 出てきな!!」

闇雲に鏡の壁をぶち破りながらしばらく魔女を捜し続ける。壁の向こうに居る気配だけは感じるのに、いくら鏡を壊しても魔女は見つからない。

魔女結界に現実世界の物理的距離は関係ない。脱出するには魔女を倒すか、魔女自身がその場から逃げていくかのどちらか

だけだ。

しばし膝に手をつけて息を整える。その拍子に床に散らばる鏡の壁の破片に目をやると、相変わらず一つ一つ違う服装、違う年齢の自分がこちらを見つめている。それに耐えきれなくなった杏子は、しばし目を閉じる。

「……っ!!」

不意に後ろから襲ってきた衝撃。腕で顔をかばいながら床に倒された杏子は、身体を捻って自分にぶつかってきたものの正体を見極めようとする。

さっきまで杏子がいた場所では、人間一人ほどの大きさの不定形の黒い固まりがうごめいている。どうやらこれが、杏子に体当たりを食らわせた相手らしい。

「やっと出てきてくれたね……」

身体を起こす杏子の目の前で、鏡に映る自分の像が次々に黒く染まるとそのまま鏡の中から這い出てくる。瞬く間に数を増やした彼らに取り囲まれながら、杏子は腰を落として槍を構える。

「あたしに不意打ちなんて、魔法のくせしてやるじゃん」

まるで合わせ鏡のように、際限なく周囲を取り囲む黒い影は増えていく。もしかしたらこの魔法は一体ではなく、集合体なのかもしれない。

「そうそう。そうやって本性を見せてくれれば、楽に戦えるってもんさ!!」

杏子が振った槍が魔法を切り裂く。移動した拍子に新しく写った鏡の中の幼い杏子が黒く染まり、また新しい魔法が這い出してくる。

「……っ!! まだ増えるのかよ!!」

「助けに来たわよ、佐倉さん」

舌打ちした瞬間に響いた声に、杏子は思わず上を見上げる。はるか上の鏡の間の入口で、浮かばせた大量の銃とともに立つマミが見えた。

「これで終わりよ!!」

マミの号令と同時に、浮かんた銃が一斉に火を噴き、一撃で視界の中にいる魔法たちの半数が吹き飛ぶ。二発目のために再び銃を展開し始めたマミと、呆然と立ち尽くす杏子をよそに、恐怖におびえたらしく魔法たちは闇に包まれた通路の奥へと後退していく。

マミが銃を展開し終える頃には、結界が次第に薄れ見滝原郊外の倉庫街の風景が周りに戻ってきていた。

「逃げられちゃったわね…… もう一撃できれば、ぜんぶ仕留めたのに」

マミが銃を構えたままため息をつく。

「佐倉さん、貴女はちよつと不注意すぎるわ。そんな戦い方してたら、いつか魔法にやられるわよ」

ウィンクしながら銃を手品のように消し、マミは慥然とする杏子に声をかけた。

どんなに数がいっても一体ごとの能力は大したことがない魔女だった。ママに助けられずとも自分だけで切り抜かれた自信はある。

「うるさいなあ…… あんただって、あんなに魔法を連発していいのかわ？　すぐにソウルジェムが濁っちゃうじゃん」

いまさらママに指摘されるまでもなくわかってる。そう思うと、杏子の口調が心なしかきつくなる。

「私はいいのよ。グリーンシード、まだこんなにあるし」

だがママはそれを気に留めた様子もなく、懐から無造作に四個ものグリーンシードをつかみ出す。

「貴女のような魔法少女に前で戦ってもらえると、私みたいなタイプはすごく助かるわ。それに私、治療の魔法も使えるのよ」

近づいてきたママが杏子に手をかざす。拒むまもなく、瞬く間にママの手から漏れる光が魔女に倒されたときについた杏子の傷を治してゆく。

魔法少女の魔法は契約の願いを忠実になぞる。治癒の魔法と言うことは、誰かの回復でも願って契約したのだろうか。

「ありがと。じゃあ、あたしはこれで……」

言い残してその場を去ろうとする杏子の肩にママが手をかけて引き留める。

「待って!!　佐倉さん、私が持つてるグリーンシードを分けてあげるからそれで協力してくれない?」

「グリーンシードを……?」

魔法少女にとつてのグリーンシードはそれこそ食事と同じくらい大切なものだ。手に入れる手段が魔女からに限られている以上、おいそれと手放したりできるものではない。なのに、この娘は……

「佐倉さん、いま手持ちのグリーンシードがほとんど無いでしょう?　持つていたら、今ごろ浄化しているはずだものね」

ママに痛いところを突かれて杏子は押し黙る。今まで持つていたグリーンシードはちょうど使い切ってしまったって、この魔女を倒して手に入れるつもりだった。

だが、魔女はもう逃げてしまっている。鏡を壊したりして無駄に魔力を使ったので、杏子のソウルジェムは浄化が必要なくらい濁ってしまったている。

「……なら、さっきの魔女、鏡のあいつを倒すまでは協力してやるよ」

背に腹は代えられない。けれど、ずっと続く協力関係なんてまっぴらごめんだ。

杏子の言葉にママが満面の笑みを浮かべる。

「私としてはこれからずっと二人で戦ってもいいんだけど……」  
「これからさきに倒す魔女が落としたグリーンシード、全部あたしにくれるならね」

それはさすがに無理よ、とママが口を尖らせて不満を漏らす。さすがにそこまでの条件をのみはしないのか。普通の魔法少女なら当然ではあるが、一風変わっているママなら賛成するので

はないかと心のどこかで疑っていた。

もちろん、ママがそんな条件を飲む狂った魔法少女だったとしたら、今すぐに手を切ってこの場を去るつもりだったが。

「じゃあ、これで魔法少女コンビ結成ね!! よろしく、佐倉さん」

「……ああ。よろしく」

杏子の右手を両手で固く握り、ママが目をうるませながら握手してやる。そんな彼女に杏子は仏頂面で微かにうなづく。

「それじゃあ、私の家まで行きましょか。おととい、隣町まで行つて買ってきたケーキがあるのよ」

「おい、ちょっと待てよ。あたしはまだあなたの家に行くなんて一言も——」

「来ないの?」

否定されることなど考えていなさそうなそぶりで見つめながら、杏子は頭をかいた。どうも、こんな風に見られると調子が狂う。

「わかったよ。ケーキ、食べに行つてやるから」

\*

「えいっ!」

両手に銃を握ったママが発砲する。銃弾を身に受けた魔法が、身をよじりながら逃げ出していく。

「佐倉さん、そっちに行つたわ!」

「はいよ!」

一突きで数体の使い魔をまとめて突き刺していた杏子が、ママの声を受けて振り向く。ふらふらと飛んでくる魔法をママの腕から伸びたりボンが縛り上げ、ちよと杏子の目の前でつるし上げる。待つてましたとばかりに杏子が槍を突き刺すと、身体を中心に貫かれた魔法は一瞬だけ大きく震えて枯れ葉を散らすように消えていった。

「さすがよ、佐倉さん!!」

「ちよ、ちよと待てて」

境界が薄れ、夜の工場地帯の風景が周りに展開する。緊張をゆるめて変身を解いた直後に喜色満面のママに杏子は飛びつかれる。豊満なママの身体に押され、杏子は二、三步たたらを踏む。

あの日から二週間あまり、いくら探しても鏡の魔法の気配は見つからなかった。なし崩しにママの夜のパトロールに付き合おうちに、杏子とママは既に鏡の魔法とは別の魔法を五体も仕留めていた。単独で街をうろつく使い魔もおなじく五体ほど仕留めているから、戦いのない夜の方が少ないくらいだ。

霊脈がどうか地形がどうかで、見滝原の街は特別に魔法が発生しやすいとキユウベえから聞かされた覚えがある。だが、

正直なところここまでだとは思っていなかった。

杏子がむかし戦っていた見滝原の街外れ、教会の周りはこれほどひどくなかったし、ましてここ数年を杏子が過ごした郊外の町ではせいぜい週に一体と戦えばいくらいだったのだからなおさらだ。

こんな所では、契約した直後から力を発揮できる魔法少女——すなわち天性の才能が有るものでないかぎり長く生き延びることは出来ないだろう。普通の娘なら、一週間と持てばいい方か。

ママがこの街で他の魔法少女に出会わなかったのは、きっと出会う前にみな死んでしまったから。

二人で戦うことを無邪気に喜ぶママはこのことに気づいているのだろうか。自分の胸に抱きついているママを、杏子はどこか冷めた面持ちで見下ろす。

「さて、ソウルジェムが汚れちゃったから綺麗にしないと」

ひとしきり喜んだあと、ようやく杏子から身体を離れたママがつぶやく。ママが懐から取り出したグリーンフィードに穢れを移す横で、杏子も先ほどの魔法が落としたグリーンフィードを拾い上げる。

例の鏡の魔法のグリーンフィードは譲ってもらう約束はしたけれど、それ以外の魔法をママと一緒に倒すことになったのは予想外だった。そこで追加の条件として、魔法にとどめを刺した方がグリーンフィードを拾う権利があると取り決めていた。

そんな風に決めているのに、ママは杏子にとどめを譲るようなことを平気でやる。今日の魔法だつてそうだった。

「うーん、これ以上は危ないかしら」

ソウルジェムから穢れを移し終え、真っ黒く染まったグリーンフィードを顔の前に持つてきてママが眺めている。

「もうそんなに黒くなったの？ 一回の戦いであんなに撃ちまくるからに決まってるじゃん」

「これはもう駄目ね。あとでキュウベえに渡しておかないと」

ほとんど真っ黒になったグリーンフィードが不気味に振動をはじめ。ママはため息をつきながらそれをハンカチに包んでバッグの中に入れてしまう。

「もう一個使い切っちゃうってありえない？ あんた、本当に大丈夫なの？」

「大丈夫。今までもずっとこんな感じでやってきたし、何とかなるわ」

「何とかって……」

さすがに危ぶんだ杏子の言葉にもママは微笑むばかりだ。やはり、見滝原という異常なほど魔法の発生の多い街で数年間も一人きりで戦ってきたママの感覚はどこかずれている。

「前にも言ったけど、あんたの戦い方は効率が悪すぎるんだよ。あたしみたいな直接攻撃なら、武器を維持するだけの魔力消費で戦えるのに」

「私の武器は銃なのよ？ 佐倉さん、貴女と同じようには出来

ないわ」

眉を寄せてママが答える。その固定観念こそが戦法の硬直を  
招き、やがてそれが死に繋がると言うのに。

魔法少女の武器や戦い方はそれぞれの性格や願いに強く影響  
される。そしてそれ故に魔法少女たちは自分の武器、自分の戦  
い方に強く固執する。

おっとりとしたママが近距離戦を嫌い、銃を武器とするのは  
しごく当然のことだろう。杏子だって槍を手放すつもりはない。

「確かに魔法少女になつてから身体の動きがすこし軽くなつた  
けど、銃が武器じゃ貴女のような戦い方は出来ないわ」

「何もあたしとまるつきり同じ事をする必要はないさ」

変身を解いたまま、杏子はソウルジェムから槍を出して勢い  
よく振るう。幾つもの節に分かれた槍がしなりながら伸び、遠

くに転がる空き缶をはじき飛ばした後で手元に戻る。

「こんな事ができるのはあたしだけだ。でも、あんたにはあんな  
たなりの冴えたやり方があるじゃん」

足元に転がる空き缶を拾い、杏子はママに変身を促す。

いぶかしげにしながらママがもう一度魔法少女姿に戻る。

黙って変身が終わるのを待っていた杏子が空き缶を投げつける  
と、反射的にママは銃を構え撃ち落とす。

「こうやって撃てばいいじゃない。何度も言うけど、他にどんな  
戦い方があるのよ」

「なら、連続できたらどうする？ その銃、一挺に付き一発し

か撃てないんだらう？」

「それならこうするだけよ」

ママが手を広げると魔法少女の衣装の腕と服、スカートの中  
から何挺もの銃が現れる。地面に降り立つと勝手に自立する銃  
たちの中で、ママは目を細めて微笑む。

「どうかしら？」

「わかったわかった。それならね……これでどう!!」

予備動作なしに踏み込んだ杏子がママに向かって槍を伸ばす  
と、節に分かれないまま長さを増した槍がママの鼻先で止まる。

「魔女や使い魔にはいろんなタイプが居るのはあんたも知って  
るはずだよ。これから先、こういう戦い方をしてくる奴がで  
てこないと何故言えるのさ？」

「佐倉さん、あなた何を……」

「自慢の銃が火を噴く前に、あたしはあんたを貫けるよ。さあ  
どうする？」

あつけにとられていたママの目に涙が広がっていく。ちよつ  
とやり過ぎたかなとも思っけれど、甘すぎるママにはこのくら  
いでちょうどいい。

恐怖のあまり身体を震わせたママが銃を取り落とす。周りに  
立っていた銃も一緒に倒れるところを見ると、地面に突き刺  
さっているわけではなく魔法で制御していたのか。

「あたしたちは仲間でしょう？一緒に魔女を倒すって約束し  
たじゃない!」

鼻声になったママが叫びながら後ずさるが、それに合わせて距離を詰める杏子の槍からは逃げられない。

杏子が槍を少しだけのぼし、ママの鼻先を軽く突く。息を呑み身体を硬くしたママをニヤリと笑いながら見つめると、杏子は槍をソウルジェムの形に戻した。

それと同時に腰を抜かしたママが崩れ落ち地面に座り込む。

「ひどいわ……」

うつむいたママの瞳から落ちる涙が、埃に汚れた裏路地のタイルに染みを作ってゆく。

「あんた、魔法少女になる前に銃を撃つ練習をしたことある？」

さすがに少々ばつが悪い。間を持たせるように、静かに泣き崩れるママに杏子は尋ねた。

「もちろん無いに決まってるじゃない。でも、それが何か？」

顔を上げたママが不満そうに答える。

「なら、初めて魔法少女に変身してその銃を握った時、どう思ったのさ？」

「……安心、かしら。こんなもの、触るところか見たこともなかったのに、不思議と手になじんだわ」

ママが銃を拾い上げ、その銃身をそつとなでる。その手つきは武器に対するものと言うより可愛がつているベットを触るかのようだった。

「そう、それだよ」

そんなママの姿を眺めながら、杏子が穏やかに告げる。自分

もそうだった。初めて手に取った瞬間から、この槍をまるで腕の延長のように自由自在に扱えた。

「魔法少女の武器つてのはね、イメージが全てなの。自分ならこれで戦える。これに命を預けられる。そういう強い想いが、あたしたちに力を与えてくれるのさ」

杏子の手のひらの上のソウルジェム赤い光を放ち、一瞬のうちにそこから槍が現れる。滑らかな動きで槍を構え、頭の上で回転させたあとで杏子はすぐに槍ソウルジェムの中に戻す。

「悔しいけど、基本の魔力はたぶんあんたの方が上だ。棒立ちで銃を使い捨てるだけなんて無駄だらけの戦い方じゃなくて、もつとスマートにやりなよ」

「でも、どうやって……？」

「そりゃ、あんたが自分で練習するしかないさ。あたしは槍しか使えないし」

なにが間違っているかは指摘できる。けれど、どうすればいいかはうまく教えられる気がしないし、教える気もない。

「さて、今日の魔女退治は終わりだよ。あたしはホテルに帰るから、あんたも早く帰りな」

へたり込んだままのママに声をかけ、杏子は魔法でフロントに言うことを聞かせて部屋を占拠している駅前のホテルへと向かって歩き出そうとする。

「待って!! 佐倉さん、私と特訓しない?」

「特訓?」

「二人で変身して、お互いに戦ってみればいいじゃない」

おずおずと提案してくるママの言葉に杏子は足を止めて振り返る。

「そんな無駄なことに魔力を使ったらソウルジェムが濁っちゃうじゃん。なに考えてんのさ」

「グリーンシールドが足りないなら、私からもう一つあげるわ。これを使い切るまで、特訓につきあってくれないかしら」

ママがグリーンシールドを取り出し、杏子の手に握らせる。先ほど脅すようなことをしてしまったのは自分だと思いと、杏子はママの願いをむげに断ることはできなかった。

「撃ったら必ず当てる!! 一発外す事に、あんたは一回死ぬよ!!」

「身体の周りに浮かせてる銃はただの飾り? そんなにいつべんにたくさん出せるなら、それを活かした戦い方を考えなよ!!」

「動け! 足を使え! 考える前に身体を動かす!」

橋の下の河川敷で赤い少女と黄色の少女がぶつかり合う。事情を知らない人間が見たらいったい何事かと思うことだろう。

もちろん、なにも対策をしていないわけがない。「他人に言うことを聞かせる魔法」を応用した簡単な人払いの結果を杏子

はこの場所の周りに張っている。

ママが「いい練習場所がある」と言っただけで連れてきてくれたのがこの橋の下の河川敷だった。いくら魔法の武器とはいえ、普通の女子中学生が銃の扱いに習熟するまではそれなりの経験がいるだろう。もしかしたらここは以前から彼女が戦闘訓練に自分で使っていた場所なのかもしれない。

「あんたが疲れたって、魔法は見逃しちゃくれないよ!!」

昼間は街をぶらつくかママの家でお菓子を食べては寝て過ごし、夕方になって学校から帰宅したママと一緒に特訓の場所へ。もともと体を動かすのは子供の頃から好きだった。だけど魔法少女になってからは、飛躍的に向上した自分の身体能力をもてあまし気味だったのは否定できない。

魔法との戦いをのぞくと、せいぜいの使い道はゲームセンターの体感ゲームで中学生の少女にはあり得ない点数とたたき出してギャラーを驚かせるくらいだ。学校に行っていたら部活動なんかがあるのかもしれないが、あいにくと杏子にその機会はない。

だからだろうか。いつの間にか杏子は、こうやってママに向かって全力を出せることに楽しさすら覚え始めていた。

「当てられるもんなら当ててみなよ!!」

ママが銃を構え、迫る杏子に狙いを付ける。動作を読んだ杏子が唐突に横っ飛びをする。射撃を外したママが次の銃を取り出す間もなく肉薄する杏子。悔しげに歯を食いしばったママは、

素早く逆手に持ち替えた銃で杏子の槍の穂先をはしく。

「食らいな!!」

槍をはじき飛ばされても杏子の突進の勢いは止まらない。そのまま杏子の放った回し蹴りをまともに胴体に食らったマミが回転しながら吹き飛ばす。

受け身を取って即座に立ち上がりとしたマミがよろける。それを目にして、杏子は変身を解いた。

数日の特訓でみるみるうちにマミの近距離戦の技術は向上している。まだ一度もマミの銃弾を受けてはいないけれど、あと少ししたらそれも危ないかもしれない。やはり彼女には、天性の魔法少女としての才能がある。

いや、才能だけではない。マミの戦いにかける並々ならぬ熱意には同意はできないけれど、感心は禁じえない。

彼女はそう、昔の自分のようだ。父と二人三脚で、世界をよりよきものにできると信じていた幼い自分のよう。

荒い息を吐きながらマミが銃を支えに立ち上がる。

「あんた、もう限界でしょ。今日の分はもう終わりだね」

「悔しいけどそうみたいね。佐倉さん、明日こそは一発でいいから当たってみせるんだから」

「でも、あんたからもらったグリーンフシード、そろそろ限界じゃないか? 特訓を続けるにしても、あと一日くらいかな……」

話し合いながらマミと杏子は橋の下の河川敷から出て、堤防上を走る道へ上がる。特訓をしている間にすっかり日が暮れ、

あたりを夕焼けの日差しが包んでいる。

「だめよ。特訓はもつと続けるんだから。私の魔法はみんなを助けるためのものなの。そのためには私は、もつと強くならないといけないのよ」

「みんなを守る、なんてあんたは言うけどさ。あんたにも契約の願いがあったんだろ? それはいいのかわ」

軽い口ぶりを装い、杏子はマミに尋ねる。

「まさかあんた、世界を良くしてくださいとか、正義の味方になりたいとか願ってないよね?」

「……そんなのじゃないわ」

「へえ、ならよかった。魔法なんて、自分のために使うのが一番だよ」

杏子は上着のポケットからあめ玉を取り出して封を切り、口の中へ放り込む。

「私の願いはもう、かなっちゃったから」

夕日が差す堤防の上で、マミがうつむきながらつぶやく。

「かなった……? そりゃあ、魔法少女の願いは契約した直後になかうものじゃないか。あんた、なにを——」

「私の願いはね、『生きたい』ただそれだけよ」

「それって……」

絶句する杏子のほうへマミが振り向く。横から差し込んだ夕日がその表情に影を差す。

「交通事故に遭ってね。痛くて、暗くて、怖くて、だんだん意

識が遠くなって。私はもう、ここで死ぬんだなって思った」

語りながらママが身震いをし、腕で自分の体を抱く。

「そんなときにキウウベえがやってきたの。本当にひどい事故だったのよ。奇跡の生存者って、私のことがニュースに載ったくらい」

「助かったのって、あんただけなのか？」

答への予想はついた。そんな杏子の問いに、ママは静かにうなずきを返す。

「だから、私がいまこうして生きている事そのものが魔法なの。奇跡なのよ」

二人の歩く堤防の下、穏やかに流れる川面を夕焼けが赤く染める。遠くに林立する高層ビルが夕日を浴びて輝く。

「これから先の人生ずっと、私は身につけたこの魔法で世界に恩返しをしなければいけないの。私を生き延びさせてくれてありがとう、って」

「そんなの……間違ってる。あんたを助けたのは、あんた自身の願いだ。魔法で助かった命だったとしても、それはあんた自身のものだよ」

大きなバッグを肩から提げた部活帰りらしき少女たちとすれ違ふ。薄い黄色の上着に胸元にはリボン、チェックのスカート。制服はママと同じ見滝原中学のものだ。

「ううん、違いわ。魔法は私に生きる意味をくれた」

ちらりと通り過ぎる少女たちに目をやり、ママが続ける。

「魔法少女は、夢と希望を振りまくものなんでしょう？ 私はね、そう思いたい。そう信じたいの」

希望に満ちた目で言い切るママ。彼女の様子に、杏子の胸中に黒いものが広がっていく。

そんなことを信じていられるのも今だけだ。いつかきっと彼女も、自分のように折れてしまう日が来る。

たとえばそう、「自分のためにだけに魔法を使う」自分がどんなことをしているか逐一ママに告げたら彼女はどんな顔をやるだろう。特に言うことでもないと思つて黙っていたけれど、なにもかも洗いざらいぶちまけてやろうか。

だが同時に、ママこそは昔の自分が信じた道を最期まで突き通してくれるのではないかとも思う。

相反する感情に胸中がざわめく。そんな杏子を、ママは気遣うように見つめる。

「佐倉さん？ どうしたの？」

「あたしは——」

杏子が口を開こうとした瞬間だった。ソウルジェムを指輪の形にしても感じる強い魔法の波動に、二人は立ち止まる。

「おい、これって……!!」

ママがうなずく。

「あのときの鏡の魔法の気配ね。家に帰っている暇はないわ。佐倉さん、このまま追いかけるけど大丈夫？」

「ああ。何なら変身して飛んでいくかい？」

二人でソウルジェムを宝石の形に変化させると、より気配がをたどりやすくなった。魔女の気配を追って見滝原の街を郊外へ向かって杏子とマミは走る。たどり着いた先は、見滝原と山を挟んだ隣町とを繋ぐトンネルの入り口だった。

ちょうど、杏子がこの街に来るときに通った道だ。

トンネルの中の暗闇が不気味にうごめく。この様子だと、トンネル全体が結界に飲み込まれているようだ。

「じゃあ、飛び込むよ。用意はいい？」

「佐倉さんこそ」

ソウルジェムを掲げると、それぞれ赤と黄色の光の粒子が二人の体を包む。混じり合った光が消えたあとに、魔法少女の衣装をまとい、それぞれの武器を構えたマミと杏子が立つ。

「それじゃ、いくよ!!」

肩に槍を担いだ杏子はマミに一声かけると結界に飛び込む。

両手に銃を構えたマミがその後ろに続く。

「一気に飛ばすよ」

「わかったわ!!」

マミに声をかけて杏子は飛び上がり、魔女が居るであろう結界の最深部へ一直線に飛ぶ。時折後ろから聞こえる銃声は、飛行しながら狙撃しているマミのものか。

一度来たことがある結界だから道に迷うことはもう無い。ためらうことなくいくつもの分かれ道を通りすぎ、杏子とマミは瞬く間に最深部、あの鏡の大広間へつづく光の扉へたどり着く。

「この奥に魔女が居るのよね？」

「ああ。あんた、用意はいいかい？」

うなずきながらマミが両手に銃を構える。それを見た杏子は、一息に光の扉へ飛び込んだ。

「……!! 私の小さな頃？ そんな……」

「気にするな!! 単なる目くらましみたいなもんさ!!」

周囲をぐるりと取り囲んだ鏡の中から、幼い頃の姿をした杏子とマミがこちらを無表情に見つめている。そういえば、マミは前回は鏡の間の中に入ってこないで入口から射撃しただけだったか。

鏡に映るマミは、幼いなりにおしゃれしたよそ行きの格好をしている。もしかして、これは彼女が事故にあったときの姿なのだろうか。

「周りの鏡を壊しな!!」

長くのぼした杏子の槍が数枚の鏡をまとめてたたき割る。その音に呪縛を解かれたマミも、体の回りにたくさん銃を出現させて射撃を始める。

割った鏡の向こうにはまた鏡がある。いくら壊しても、こちらを見つめるよりよき頃の自分たちの姿は消えない。

「佐倉さん、こんな事をしてなにか意味が……？」

マミが疑問を浮かべると同時に、未だ残っている鏡に映る様々な姿をしたマミと杏子が黒く染まり不定形の固まりとなって鏡の外に這い出してくる。

「なによ、これ……?」

「これがこの魔女の正体さ。こらえきれなくなつてこうやつて出てくれば、もうこっちのもんだね」

にじり寄つてきた魔女の断片を数体まとめて杏子は槍で突き刺す。

「佐倉さん、鏡一つからは一体しか出てこないわ!」

「なら、残つている鏡の全部にいったん写つてから、まとめて倒しちゃえばいいね!」

杏子が魔女の断片をかわしながら飛び回り、自分の姿を鏡に映す。新しい鏡に杏子が映るたびに、次々に鏡の中から新しく魔女が這い出てくる。

出てくるそばからマミが狙撃していくが、増加のペースがあまりにも速すぎて追いつかない。

「ちっ……!!」

自分を追いかけていた魔女の一軍が突然向きを変え、マミの方へ突進し始める。杏子は慌てて方向転換し、槍をのぼしてなぎ払うが群れ全体を倒すまでにはならない。

遠くの魔女を狙撃するのに気をとられたマミは、魔女の群れが向かってくるのに気づいていないように見える。

「マミ!!」

顔を上げて杏子の方を一瞬見たマミが笑った気がした。

「えい!!」

眼前に迫つた魔女の群れにマミが両手の銃を放つ。撃ち漏ら

しが突進してくるのを弾切れの銃をクロスさせて構えて防ぎ、そのまま押し返す。

いつの間にかスカートの中から現れていた新しい銃をマミが足で蹴つて跳ね上げる。宙に浮く銃をよそに、マミは手に持った弾切れの銃で後ろから襲いかかつてきていた魔女を横殴りに叩き潰す。一回転したところでちょうどよく体の前にあがつてきた新しい銃に持ち替え、先ほどはね飛ばした魔女に狙いをつける。

「これで!!」

狙いあまたず銃弾が魔女を貫く。杏子が助けに入る間もなく、マミに向かった魔女たちは一掃されていた。

宙に浮かんで見下ろす杏子に向かってマミがウインクする。やるじゃないか、あの娘。

「佐倉さん、あと少しよ」

しばらく飛び回りながら魔女を突き刺したあと、杏子はマミの隣に降りる。彼女の指す方向を見ると、ばらばらでは勝ち目がないと悟つたのか魔女の断片たちが固まって一体になろうとしていた。

「ずいぶん大きいな……」

周囲の鏡から新しい魔女が出てくる気配はない。つまりは、あれを倒せばそれでおしまいだ。

「私に任せて。あのくらいなら一撃だから」

そういえば初めて出会ったときにも、確かマミは巨大な砲

を使っていた。またあれで攻撃するのだろうか。

「佐倉さん、ちよつと危ないから少し離れていてね」

合体を終えた魔女の黒い固まりが気味の悪い音を立てながら震えている。ママの言葉に従い、杏子は彼女から距離をとる。

「これで終わりよ……」

ママが襟元からリボンを引き抜いて宙にかざす。空中で絡まったリボンが急激に体積を増して大砲を形作る。大砲から生えた脚が結界の床にしっかりと固定される。

砲の後部で片目をつぶり狙いをつけたママが高らかに叫ぶ。

「ティロ・ファイナーレ!!」

放たれた巨大な光線が魔女の固まりの中心を貫く。ばらばらになっていく魔女。砲弾を放つと同時に消滅する大砲。

「ふう……」

一仕事終えた満足感をたたえ、ママが額の汗をぬぐう。

「佐倉さん、やったわ!! 見てたでしょう?」

「おい、後ろ……!!」

うれしそうにこちらへ駆け寄ってくるママの後方で、砲弾に貫かれなかったほんの少しの魔女が再び集合する。

杏子の声に立ち止まり、振り向いたママへ魔女の触手が伸びる。銃を出すことすらせず、棒立ちになって固まるママ。

「なにやってるのさ!!」

槍をのびしながらママへ駆け寄った杏子が伸びてくる魔女の触手の先端を切り落とす。その勢いのまま槍を振り回し、残つ

た本体をめつた打ちにする。

槍を手元に引き寄せ、分離していた柄を結合させる。全力で飛び上がり、杏子は体当たりするように突き上げて残っていた魔女の中心を貫く。

ぶるぶると震えた魔女が次の瞬間に細かい霧になって消え去る。それと同時に結界が薄れ、何の変哲もないどこにでもあるようなトンネルの風景が戻ってくる。

へたり込むママの横で額の汗をぬぐう杏子の耳に、少し離れたところにグリーンフィードが数個ほど路面に落ちる音が届く。複数個を落とすタイプとは珍しいが、集合体の魔女だからだろうか。なににせようれしい収穫だ。

「それじゃ、約束だからこれはあたしがもらうよ。これで、あなたと協力するのも終わりだね」

グリーンフィードを拾い集めながら杏子はママに声をかける。

「佐倉さん、待って。あなた、これからも見滝原の街に居るのよね?」

「うーん、どうしよっかなー」

見滝原で魔法少女として活動を続ける限り、どこかでママと行き会おうだろう。

自分自身のための願いで契約し、他人のために戦い続ける魔法少女。他人の願いを叶えるために契約し、いまは自分自身のためにだけ魔法を使う自分とは正反対。

そもそも、ここまで協力関係を結べただけでも奇跡のような

ものだと思ふ。グリーンフィードという媒介がなければ、とつくの昔にマミと自分是对立していただろう。

特訓なんかをやったおかげでちよつと情が移ってしまった。

マミの家でたくさん食べさせてもらったケーキもおいしかった。だけど、そろそろ潮時なのかもしれない。

そういえば、この近くにちよつどいい場所が……

「ちよつとどこまで、歩けるかい?」

「なに? あんまり遠くでなければ大丈夫だけど……」

マミの答えを聞くと、杏子はトンネルを出て見滝原へ戻る方向へ歩き出す。慌ててついてくるマミを従え、しばし歩くと杏子は立ち止まり道路脇のガードレールを軽やかに乗り越える。まごつくマミをよそに、闇の広がる森の中を迷いのない足取りで杏子は進んでいく。

「ちよつと、佐倉さん。いったいどこまで行くつもり?」

「もうすぐだつて」

マミを連れ杏子が高圧電線の鉄塔の下で足を止める。きらびやかな見滝原の街の灯りのせいで、上に広がる夜空にはほとんど星が見えない。

「……よし」

一人うなずいた杏子が鉄塔の上へ飛び上がる。あつげにとられて見上げるマミに向かい、杏子は手を伸ばした。

「ほら、あんたも来なよ」

「そんな、危ないわよ」

「うちらの身体なら大丈夫だつて」

ためらうマミを杏子は辛抱強く待つ。あきらめたのか、マミはため息をつく。杏子の隣へ飛び上がった。

「こんな事をするの、今日だけだからね」

「じゃ、もつと上に昇るぞ。きちんとしてこいよ」

鉄骨から鉄骨へと軽々と飛び、杏子は鉄塔の上を目指す。一瞬下に視線を向ければ、負けずについできているマミの姿が目に入った。

三段ある高圧線鉄塔の腕木の一番上。立ち並んでいた木々の梢は、もう視界にも入らない。

鉄骨に腰掛けると、杏子は上着のポケットから取り出した菓子封を開けた。

「佐倉さん、こんなところまで来るなんて聞いてないわよ」

遅れてやってきたマミが、杏子の隣に座る。地上から十数メートル、並の人間では落ちたらひとたまりもない高さだが、魔法少女の平衡感覚の前では公園のベンチと変わりはない。

「あんたと出会う前、この街に戻ってきたときにさ。あたし、ここから街を見下ろしたんだ」

眼下には広大な見滝原市街が広がっている。郊外に建ち並ぶ風力発電の風車が勢いよく回転しているのが小さく見える。

「あんたには、あの街がどう見えるのさ?」

顎をしゃくつて杏子が眼下に広がる見滝原の夜景を示す。中心街にそびえる高層ビル群では航空灯が明滅している。

その上を、海に面した工業地帯から流れた煙突の煙がゆつくりとたゆたっていく。

「大切な、私の……私たちの街よ。守ってあげなければいけない人達の住む街。きつとあの灯り一つ一つの下に、それぞれの幸せな家庭があるんだわ」

マミの遠くを見るような目は、果たしてただ見滝原の市街地を眺めているからだけなのだろうか。

「ああ、そう」

言外に同意を求めているようなマミの声色を無視し、杏子は素っ気なく呟く。眉を寄せたマミが座ったまま杏子の方へにじり寄り、その手を取る。

「佐倉さん、あなただつてそう思つてるでしょう。だからこれから私も、私と——」

「あたしには、あの街は単なる魔女と使い魔の養殖場にしか思えない」

マミから顔をそらしたままの杏子は視線の先では、ひときわ目を引く高さの見滝原中央病院の黒々とした姿がある。

「あなたと一緒に使い魔を何体かやつつけたら？ あのととき、こんな無駄だつてずつと言いたかった。使い魔なんて放っておけばいい。あいつらが魔女になるまで待てば、それだけたくさんのグリーンフシードが手に入るのに」

使い魔は育つ前の種であり、魔女は収穫すべき果実。杏子にとって、それはしごく当たり前の現実だ。

「そんな……!! 使い魔だつて放つておけば人を殺すこともあるのよ。魔女になるまで待つなんてありえないわ」

マミの手をふりほどき、杏子は鉄骨の上に立ち上がる。「自分のために魔法少女になったあなたも他人のために戦つて、他人のために魔法少女になったあなたが自分のために戦う」

ふつと息を吐き、杏子は首をめぐらせてマミを見つめる。「ほんと、皮肉なものだよね」

「佐倉さん、あなたのやり方には賛成できないわ」

こちらにも鉄骨の上に立ち上がったマミがソウルジェムを銃に変化させ、杏子に突きつける。

「……そんなこと、させない」

「へえ、いつの間に変身しないで武器を出せるようになってたの？ あたしなんてそれが出来るようになるまでかなりかかったのに」

「私たち魔法少女に、こんな人とは違う力が備わっているのはなんのためか忘れたの？」

「あたしたちが魔法少女なのは、願いを叶えてもらった代償だろう？ ただそれだけのことじゃん」

「あなたは……っ!!」

マミが言葉尻に怒りをにじませるが、どこ吹く風で杏子は彼方を眺めている。

「あなたとなら、うまくやつていけると信じていたのに。二人で街を守るって、思つてたのに」

「悪いけど、あたしはそういうの、どうでもいいから。魔法なんて、自分のために使えばいいのさ」

目の前で表情に怒りをにじませるママの姿が、契約したばかりの頃の自分とだぶる。あの頃の自分も、父の話聞いてくれない見滝原の住人たちにこうやって幼い怒りを抱いていた。

背中に隠したソウルジェムから杏子が槍を出現させ、その勢いのまま振り回す。上半身を反らせてかわしたママがバランスを崩す。

「足元がお留守だよ!!」

「きゃっ!!」

すかさず足払いをかけた杏子にあえなく倒され、ママは頭から下へ落ちていく。落下する途中のその全身が黄色い光に包まれ、その中から魔法少女の衣装に身を包んだママが現れる。

四方八方にリボンを伸ばし、鉄塔と木々にリボンを引っ付けたママが空中で制動を掛ける。

「まだまだっ!」

何とか体制を立て直し、足から地面に降りたママに上空から杏子が一直線に襲いかかる。とっさにママが出した二挺の銃と杏子の槍がぶつかり合い火花を散らす。

「佐倉さん、なにをするのよ!!」

「先に銃を向けてきたのはあんたのくせに、何を言ってるんだい? あたしとあんたはもう仲間でも何でもないからね。見滝原の縄張り、あたしがもらうよ!!」

銃身と槍の柄で押し合いながら、杏子とママがにらみ合う。後ろに飛んで距離をとると、二人はお互いに武器を構えて対峙する。

ママの伸ばした腕からリボンが伸びる。槍を振り上げて杏子はリボンを切り落とす。切断されたりとしたリボンが地面に落ちるより早く、ママの手元から新しいリボンが伸びてくる。

森の木々を利用して飛び上がった杏子が上からママに槍を振り下ろす。銃身を利用して受け止めたママにうまく受け流され、杏子が一瞬体勢を崩す。

その間に距離をとり、身体の回りにたくさんの銃をママは展開させる。杏子がそれに気づいた瞬間には、ママの銃は火を噴いている。

「狙いが甘い!!」

飛び退いた杏子からだいぶ外れた地面や木々を、ママの銃弾がうがうがう。

「あれ……?」

外れ弾の弾痕から無数のリボンが伸びてくる。四方八方をリボンに取り囲まれ、対処する間もなく杏子は全身を縛り上げられて木から吊される。

取り落とした杏子の槍が煙を上げて消えてゆく。新しい槍を出そうにも、全身を何重にもリボンで締め上げられた状態では腕を動かすことすらできない。

「……完敗だよ。やるじゃん、巴ママ」

「敵しい目で杏子をにらみつけ、油断なく銃を構えたままママが近寄ってくる。」

「銃弾からリボンを生やす、か……銃も銃弾もリボンも、全部魔法生成物だから相互に変換可能だったね。やっぱりあんた、たいした魔法少女だよ」

「この街は私一人で守る。あなたみたいな魔法少女には、指一本触れさせないわ」

「こうしてると、初めて会った時を思い出すじゃないか」

「あのときと違うのは、自分を拘束しているのが魔女ではなく魔法少女だと言ったこと。」

「佐倉さん、今すぐこの街から出て行って」

「いまにも自分を撃ちそうな勢いのママに、あきれたように杏子はうなずく。」

「巴ママ、あんたが居なくなったら、見滝原の縄張りにはあたしがいらないよ」

「あなたになんて渡さないわ。この街のみんなは、これからずっと私が守るもの」

銃を突きつけるママの前で、リボンから解放された杏子は姿身を解いた。警戒したママにソウルジェムを取り上げられ、二人は元来た道路へ戻る。

「佐倉さん、もう一度訊くけど、私と一緒にこの街を守ってくれるつもりはないのね？」

「あんた、くどい。そんなんじゃ男の子にもてないよ？」

「そういう話をしてるんじゃないわ……っ!!」

顔を紅潮させたママの身体に杏子に銃を突きつけられ、杏子は苦笑しながら両手を上げた。もしかしたら、いまの発言は何かママの逆鱗に触れていただろうか？

「じゃあね、巴ママ。あんたのケーキ、おいしかったよ」

「最期に一言だけ言い残すと、返事を聞かずに杏子は歩き出す。もとより自分には決まった居場所はない。昔のように、根無し草の暮らしに戻るだけだ。」

上着のポケットに手を突っ込むと、奇跡的にスナック菓子の箱がまだ残っていた。内袋をあげ、取り出した菓子をくわえる。

背中には自分を監視しているママの視線を感じる。もしかしたら、彼女はまだ自分に銃を向けているのかもしれない。

「そんなびりびりしなくてもいいっつーの」

歩きながら杏子がこぼした言葉は、誰にも届かない。

\*

山の中の森を切り開いた峠道を、こんな時間に通ろうというものなどほとんど居ない。

この峠のトンネルを抜ければその先は見滝原の街だ。山越え

をする前に買って来た沢山の鯛焼きもあと一つを残すばかり。軽くなった袋を抱え、星のほとんど見えない闇夜の中を杏子はひとり黙々と歩いてゆく。

その昔、このトンネルに張られた魔法の結界でマミと二人で戦ったことを思い出す。改めて歩いてみると、トンネルはあきれるくらい短い短さだった。

追い越していく乗用車のヘッドライトからの光で、杏子の影が長く伸びる。

「……っただね」

見覚えのあるガードレールを見つけ、杏子は足を止める。

ガードレールを乗り越え、闇に包まれた森の中を脇目もふらずに進む。しばらくの後、森の中に現れた高圧線の鉄塔を見上げて杏子はしばしその場にたたずんだ。

「……………」

無言のまま飛び上がった杏子はそのまま勢いよく高圧線鉄塔の上へと昇っていく。

バマミ。かつて杏子がほんの少しの間だけ共闘した魔法少女。

この場所で、一緒に見滝原の夜景を見下ろした少女。

あのと時からもう一年ちかくなる。マミに追われ見滝原を出て各地を転々とするうちに何人か他の魔法少女に出会ったけれど、やはりどこにもマミのような娘はいなかった。

そのマミが、死んだという。

新米ならともかく、もともと高い魔力を持つうえに杏子みず

からが戦いの手ほどきをしたマミが死ぬなんて信じられなかった。

それとも、マミを殺すほど強力な魔法がまた発生したということなんだろうか。

「待つてな、マミ。この街の縄張りは、あたしが引き継いでやるよ」

鉄塔の上で腰を下ろし、夜景の明かりを見下ろしながらぼつりと呟くと杏子は鯛焼きを頬張る。

「それは無理だよ、杏子。この街にはもう新しい魔法少女がいる」

闇の中から音もなく現れた白い姿を杏子にはらみつけた。

「いやあ、まさか君がやってくるとはね」

「こっちはマミの奴がくたばったって聞いてわざわざやってきてやったのに、話が違っちゃんか？」

「悪いね、この土地にはもう新しい魔法少女がいるんだ。さつき契約したばかりだけど」

口ぶりだけは済まなさそうに、しかし全く表情を変えないキュウベえ。

「はあ？ なにそれ、超むかつく」

どうせその娘も、考えの甘い新米なんだろう。

「でもまあいいや。こんな絶好の縄張り、みすみすルーキーのひよっこにくれてやるのもシヤクだしね」

自分のように、魔法は自分のためと割り切るでもなく。マミのように、無私に世界に尽くすでもない。大したことのない願いで魔法の力を得て、たいした覚悟もなく戦う娘が居るだけなんだ、きつと。

「どうするんだい、杏子？」

なにもかも承知だろうに。白々しくたずねてくるキュウベエを杏子は一瞥する。

鯛焼きの最後の一口を飲み込み包み紙を捨てる。鉄骨の上に立ち上がり、キュウベエの方へ向き直った杏子は歪んだ笑いを浮かべる。

可哀想なマミ。あんたも結局は駄目だったんだね。最期まで、夢と希望を信じて戦えたのかい？

あたしはあんたのようにはならない。あたしは、最期まで、魔法を自分のために使うよ。

「決まってるんじゃない」

「かつ潰しちゃえばいいんでしょ？ その娘」



## あとがき

皆さんこんにちは。宇古木蒼です。

「マミさん vs 杏子のバトルが見たい!!」というのがすべての出発点だったはずなのに、できあがったのは何かもっと恐ろしいものというか……

正直なところ、これでもまだ書き足りない気がします。

さやかのようなルーキーでもなく、ほむら・まどかのようなあの世界の魔法少女システムの枠を超越したイレギュラーでもない。ああいった「特別な存在じゃないベテラン」というのがものすごくツボなので、自分がマミさんと杏子にはまるのは必然でしたね。

特に杏子ですよ杏子。戦闘前には事前偵察を欠かさず、相手の能力が読めない場合は即撤退。自分の機動力が生かして相手の動きを制限する戦場へ気づかせずに誘導。アニメ本編5～6話の彼女を見るだけで、いったいどれだけの修羅場をくぐってきたのかわかるとういものです。彼女、対魔女戦闘以外に対魔法少女戦闘にも相当熟達してるのではないかとさやかへの対応を見てると思えてならないです。ベテラン萌え！ 燃え！

今回の表紙イラストはフーポ氏にお願いしました。急なお願いで対応して頂き本当にありがとうございました。美しく格好いいマミ&杏子の姿は、まさに内容にぴったりでした。

感想、意見などあれば奥付記載の URL よりなんでもお伝えください。「マミあん」カップリングの同士も募集中です。

今回の本では杏子の方が1年ほど魔法少女の先輩という設定にしましたが、先輩マミさん×ルーキー杏子というのもそれはそれで妄想がふくらむ……!!

まどか☆マギカは久しぶりに2次創作欲求を刺激された作品なので、今後も続けて何か書くと思います。マミさんの過去話とか、アニメ本編より前のループの話とか、やりたいことがいろいろと頭の中を渦巻いている状態です。

それでは、またどこかの同人誌即売会にてお会いしましょう。

**書名：「願い その果てに」**

**発行日：2011年5月4日（もう何も怖くない 1.5）**

**サークル：宇古木亭 (<http://ukogitei.sakura.ne.jp/>)**

**著者：宇古木蒼**

**表紙イラスト：フーポ（「Leproto」<http://leprotto.x.fc2.com/>）**

**発行人：a-park**

**印刷所：キンコーズ上野店&秋葉原製作所**